本紙は、2020年春に秋田県内で行う展覧会に向けて、出来事や表現者たちの軌跡をたどる媒体です。
展覧会をつくる過程として、展覧会オープンまでの期間に3回の発行を予定。
通常は見ることのできない、出来事や時間などかたちを持たないものを展覧会へと描き出す過程を
アーティストや企画者が公開し、思考や出来事を可視化していきます。

JOURNAL 01

ARTS & ROUTES あわいをたどる旅

江戸時代後期に東北全土を歩き、旅のなかで様々な土地に逗留して文化習俗、風土、宗教や儀式、人々の生活の様子などを記録し続けた菅江真澄。約200年前に真澄が残した記録に宿る創造性に着目し、その旅の軌跡をたどるプロジェクトが始まりました。現代美術は、様々な領域のあわい(間)に存在します。アーティストたちは歴史学や地理学、人類学や数学、情報技術など隣接する多様な領域の知に刺激を受け、現在の世界を描出しようと試行しています。本展は、アーティスト・研究者・デザイナー・運営事務局それぞれが、作品制作や研究活動のひとつひとつを主体的なプロジェクトとして立ち上げ、2020年4月から始まる展覧会までの「あわいをたどる旅」を探求します。出来事や時間などかたちを持たないものを展覧会へと描き出す過程を公開しながら、ものづくりの現場である美術大学をひらく新たな試みです。

あわいをたどる旅程

Art projects
2019.05.01.start

00 01 02 03 04 05

Journal_2019.11.15 (01)
Journal_2020.02.06 (02)
Journal_2020.03.20 (03)

Exhibition
2020.04.25-07.05

菅江真澄
(1754-1829)

秋田県立博物館蔵

江戸時代後期の紀行家、博物学者。宝暦4年(1754)三河国(愛知県東部)生まれ。本名は白井英二とされ、旅に出てから白井秀雄、秋田に入ってから菅江真澄を名のった。和学や和歌、漢学、本草学、医学などを修めた後、30歳で故郷を旅立ち、信濃、越後から現在の秋田、津軽、下北半島など東北や北海道を巡歴。48歳で再び秋田入りしてからは秋田領内を巡り、土地の民俗、歴史、地理、考古、詩歌、宗教、科学など多岐にわたる内容を客観的な目線で日記や地誌、随筆として図絵と文章とで記録した。これらは「菅江真澄遊覧記」と総称され、自筆本89冊が重要文化財に指定されている。文政12年(1829)に仙北郡で亡くなるまでの29年間を秋田で過ごし、なまはげを初めて記録するなどその著作や図絵は貴重な資料である。

唐澤太輔のコラム菅江真澄①

菅江真澄を旅へと誘ったもの

「旅travel」は、Anglo-Frenchのtravailleraを語源とする。それは苦難、辛苦、苦しいという意味を持つ。旅には「トラブルtrouble」がつきものであるが、これも、上記の語を語源とする。つまり、旅は、本来、辛く苦しく、トラブルが伴うものなのである。旅にリフレッシュや癒しを求めるのは、特に現代になってからで、菅江真澄が生きた時代において、それは極めて難儀なものであった。それにも関わらず、菅江はその生涯の多くの時間をこの旅に費やした。――なぜか?

菅江の肩書きは様々であるが「博物学者」とされることもある。私は、この肩書きが最も彼にふさわしいのではないかと考えている。「博物学」とは、現在のように、植物学や地質学、鉱物学など学問が細分化される以前の呼称である。その基本は、膨大に物事を収集し記録することにある。そして、より正確な記録のためには、実地検分すなわちフィールドワークが必要不可欠である。

「世界」を悉く知りたい、これが彼を旅へと誘った大きな理由であった。

博物学者にとって、「隙間」があることは許されない。つまり(到底かなわぬことであるが)、全てを知り尽くすことこそが、博物学者にとっての至上命題なのだ。そして、この止むに止まれぬ情熱を持った者こそが、真の博物学者と呼ばれる。

菅江は、上越、東北、北海道などを旅したが、おそらく、彼は「寿命」という限度がなければ、九州へも沖縄へも行きたかったであろう。限りある人生の中で、まず埋めようと思った「隙間」が、まだ一般的にも知られていない民俗・風習が多く残る「蝦夷地」すなわち北海道や江戸から見て「鬼門」とされた東北であった。

全文はウェブにて

PROJECT 〈00〉 真澄と美術との接点の作り方

プロジェクトを公開しながら、出来事や時間などかたちを持たないものを展覧会へと描き出す本展の起点として、8月20日、「菅江真澄をたどる勉強会」を開催。前半は吉川耕太郎氏が考古学者の視点で、小松和彦氏は秋田の人形道祖神をリサーチする過程で出会った真澄像についてレクチャー。後半はキュレーター・服部浩之氏、芸術人類学者・石倉敏明氏を交えた4人が真澄と美術の接点についてディスカッションし、真澄の記録に宿る創造性を模索した。

吉川耕太郎
(考古学者)

研究者的な視点を東北の地で醸成していった

菅江真澄は出土したものだけではなく、それがどういう地形の、どういった場所から見つかっているものなのかも考えて、研究者的な視点を自分の中で醸成していったというのがすごいなと思うんです。いろいろな人に教えられて、それを自分の中で融合させて、この東北の地で醸成していった。絵もだんだんうまくなっていく。そういう飽くなき好奇心がある。その理由のひとつとして、真澄は外から来た人だからかなと。例えば道祖神にしてもずっと見慣れていたらあそこまで描くだろうかと。真澄が表現するのは全ですよね。それはいろいろな思いとかスタンス、執筆態度もあるでしょうけれど、土地のいいところを探していこうという姿勢があったのかなと思います。本当は真澄はすごく熱い人で、その熱さを抑え込んでいるけれど漏れてくる。それが多分、生々しさのような部分につながってくるんじゃないのかなと思います。

「時層」を内包しながら領域を横断していく

服部浩之
(キュレーター)

菅江真澄が初めてこういう記録を残したという「初めて」ということがすごく印象に残りました。僕はそこまで菅江真澄の仕事のディテールを知らなかった。この人はなぜこんなふうに移動と逗留をくり返すのか、彼の旅そのものに着目していたので新鮮でした。お二人の話はそれぞれ、観察眼であるとか、どう捉えて言葉にしていたのかと興味深かったです。それは今、例えばアーティストが何かを見て形にするときの態度にも通じるものがあるなと。そういう意味では、いろいろなことを「初めて」やっているのは何でなんだろうと思って、すごく驚きました。そして記述の残し方も含めて、過去をきっちり調べ、しっかり観察することによって、未来へ残していこうとしていることを強く感じします。

秋田公立美術大学は、複合芸術を打ち出していて、学部にもアート&ルーツという通常の美大にはない ユニークな専攻があ る。今日のレクチャーを聞いていたら、そもそも複合芸術やアート&ルーツのような試みは、菅江真澄的なんじゃないかと最初からやっていた。考古学や民俗学、ろにヒントを与えてくれるという気がします。

小松和彦
(郷土史家)

真澄が記録した200年前から変わらない風習

道祖神とは、疫病などの災いや悪霊から村を守る民間信仰の神様のことで、秋田に多い人形道祖神は藁や木で作られ村境や神社にまつられ、カシマサマ(鹿島様)、ショウキサマ(鍾馗様)、オニヨサマ(仁王様)、ニンギョウサマ(人形様)などとも呼ばれています。このイラストの「ドジンサマ」と呼んでいる人形道祖神はもしかしたら真澄が記録した両手のないドジンサマそのものなのではないかという気がしているわけですが、これは一緒にプロジェクトをしているイラストレーターの宮原葉月さんが描きました。まずは人形道祖神という面白い民間信仰があるということ。そして菅江真澄が200年前にこれに初めて着眼して記録に残したこと。それを今の宮原さんが、イマジクリエイターである宮原さんが、イマジネーションを湧き立てて手がある形で描いたわけです。よく観察して描いているので、どんなにアレンジしても特徴が出ている。菅江真澄が気付きを与えてくれて、それが表現の根源になるという力が人形道祖神にはあるのではないかと思います。

私は秋田県人でありながら人形道祖神についてあまり知らなくて、そういったことに宮原さんと知り合って、一緒に取材をすることに、驚きの連続なんです。私は仕事柄、アフリカやインドによく買い付けに行っていて、地域の民族文化に非常に興味があります。でもふと、自分の地元にもプリミティブで面白いものがあることに、道祖神の取材を通して気付いたわけです。真澄の時代から変わらずに残っているもの。それに気付いたのは、私がアフリカやインドに行って戻ってきたからかもしれない。地元にいながらよそのものを見て、また視点を地元に戻せたということがあると思います。

私が人形道祖神の何に引かれるのかというと、今も現在進行系で、集落の人たちが藁人形を毎年、作り替えていること。それは真澄が記録した200年前から変わらずにやっていることに、じわじわ来るものがあります。もし真澄とアートを結び付けるのであれば、真澄が描いた絵とりが行われていない地域のドジンサマと真澄が描いた絵とを比較して見ると、プリミティブアートとしての人形道祖神の魅力みたいなことが発見できるのではないかと思ったりしています。

石倉敏明
(芸術人類学者)

時間が伸び縮みする面白さ

吉川さんも小松さんもある意味、菅江真澄の精神や態度を尊重して、とても実証的に話をされていたのが印象的でした。論理的だし、観察を大事にされているし、でも生々しいですよ、血が通っていると思っています。例えば200年前に初めて記述された道祖神のさらに奥に、道祖神っていう作られたんだろうというタイムトラベルが出てくる。あるいは記録した土器を通して、2千年、3千年という時間が出てくる。そうすると時空を超えていく。時間が伸び縮みしてしまう面白さがあります。つまり過去の旅人ではなくて、未来に行けちゃう旅人のような気がしてきました。

文化人類学の世界では、1920年代にエスノグラフィー(民族誌)という記録上のフォーマットが作られました。日本では真澄がかなり古い時期のエスノグラファー、民族誌学者と言っていいと思うんですが、行されているような、イメージと文章の両方を等価で書きながら、ある意味ではアートの領域に近づいていくということを最初からやっていた。考古学や民俗学、歴史学などいろいろなところに、道祖神っ

元祖エスノグラファーとしての存在意義

真澄の視点は、例えば宮沢賢治の視点とはだいぶ違う。棟方志功のような神話や仏教、華厳思想などの世界性の獲得の仕方とも違う。真澄は外からやってきて、秋田を中心にいろいろな所に行って「今を見る」というドキュメンタリストだったと思うんです。出来事に対して忠実であるという。そこに対して彼は想像力も豊かに使っていて、僕らは菅江真澄をそのまま楽譜のように演奏できるような気がする。僕らの中にはミミリの菅江真澄的な何かが継承されるかもしれないというような、観察者としての可能性を感じます。もともと、人形道祖神もなまはげも、もっと古くから秋田にはあったはずのものです。これを外から来た旅人が観察して、価値のあるイメージとして記録する。土地の人たちが創造した既存のイメージに対して、旅人の視点でそれ自体が新しいものとして記述しないですよね。その意味では、菅江真澄という存在は、面白い視点を提供していくということ。外の視点がないと、あるイメージについて面白いと思って記述しないですよね。その意味では、菅江真澄という存在は、卓越したイメージメーカーであり、元祖エスノグラファーでもあるという、多面的な可能性を感じますね。

真澄の名付けようもない創造性

例えば僕がやっている芸術人類学は最初から調和しているわけではなくて、芸術方面の引っ張り方と人類学方面の引っ張り方があって、かなり激しくぶつかっている部分があるですよね。菅江真澄はきれいに図を描いたりするんだけど、彼には決して日本画的な美とか、事物を美しく描いてやろうという装飾的な視点ではない、別の美学がある。そして、現代の芸術という実践は、ヨーロッパで生まれた純粋な美術というイデアを食い破って、世界的な表現の世界の中で、もっと普遍的な文脈を再構築しなきゃいけないという時期に来ています。多分、そういう時期だからこそ、菅江真澄という存在にヒントがたくさんあると思うんです。もちろん菅江真澄自身、自分のことを絵師や物語作者のようなアーティストと思っていなかったし、そう見なされてきたわけでもなかった。当時も今も、彼はアーティストだというふうに思われていない。しかし、博物学者や旅行家としての、彼の名付けようのない創造性は江戸時代の秋田藩でも認められていたし、ファンも多かった。逆に、だからこそ学べるものが多いのかなという気が僕はしています。

PROJECT 〈01〉 岩井成昭
2019/08/20

菅江真澄が残した膨大な旅の記録は、一般的にその客観性が高く評価されている。しかし、その日記には菅江が折々詠んだ和歌など、主観的な心象を偲ばせる材料も多い。遠い古の存在であると同時にリアルな旅人としての菅江は、私がまだ旅を知らない十代半ばに夢中で見続けた米国産映画への思いと重なる。それらは1960年代~70年代にかけて制作されたアメリカン・ニューシネマという潮流において、特に「ロード・ムービー」と呼ばれる作品群だ。その映像は、例外なく黄色い砂ぼこりとドライな人間関係を映し出していた。乾燥した国土を旅するうちに汚れ、損壊していく"車"に、日々衰弊する大きな傷が(ベトナム戦争)が暗示されているのを知ったのは高校に入ってからだ。正直なところ今、菅江真澄と「ロード・ムービー」を関係づける根拠は薄い。しかし、海外という空間的な距離と歴史的な距離を相互交換的なメタファーとして捉え、旅の行程と捉えることはできないだろうか…。

岩井成昭/1989年東京芸術大学修士課程修了。国内外の特定地域における環境やコミュニティーの調査をもとに多様なメディアで作品を制作し、国際展やAIRを中心に発表。1990年代から多文化状況をテーマに、欧州、豪州、東南アジアにおける調査を進める。2010年からはプロジェクトベースの「イミグレーションミュージアム・東京」を主宰、その一方で拠点を秋田におき、秋田公立美術大学の大学院「複合芸術研究科」の新設に参与したほか、同地で「辺境芸術」を標榜するなど、さまざまな活動を並行して進めている。秋田公立美術大学教授。

PROJECT 〈05〉 藤浩志
2019/09/17

作家「鳴タケシ」には旅をしてきたという自覚はない。しかし、自分の居るところ、つまり環境を変えることには積極的だった。自分をつくりかえることに貪欲なのだ。だからの移動/旅を続けている。これまでに暮らした場所は32カ所、訪問した国は25カ国。新しい自身を作ろうと次の現場に出かけ、そこに佇む。地理的な移動だけではない。最先端の都市から文字を持たない集落への時間を遡る旅もあった。あるいは都市開発、地域計画、不動産、店舗経営、公共施設やプロジェクトの運営、教育など様々な立場を渡り歩く旅もあった。そこには何かを作ろうとしている人がいて、その先に空間、仕組み、風習、素材など様々な無視できない物事が存在し、それと向き合おうとすると、この上ない濃密な時間が流れ始める。気づくと、自分のあり方が変化する。生活の意味が変わる。そんな彼の様々な旅について短編のテキストと素描とオブジェで描いてみようかな。

藤浩志/1960年鹿児島生まれ。京都市立芸術大学在学中演劇に没頭した後、地域をフィールドとした表現を模索。同大学院修了後パプアニューギニア国立芸術学校に勤務し原初的表現と文化人類学に出会う。バブル崩壊期の再開発業者・都市計画事務所勤務を経て土地と都市を学ぶ。「地域資源・適性技術・協力関係」を活用した美術表現を志向し、全国各地でプロジェクトを試みる。家庭廃材を利用した「Vinyl Plastics Connection」「Kaekko」「Polyplanet Company」「Jurassic Plastic」。梨空のキーパーソンをつくる「藤島八十郎」等。NPO法人プラス・アーツ副理事長、秋田公立美術大学教授、NPO法人アーツセンターあきた理事長。

PROJECT 〈03〉 迎英里子
2019/08/20

迎英里子は"approach"というタイトルとナンバリングのパフォーマンスをシリーズとして制作してきた。

屠畜や石油の採掘、貿易など社会や自然現象に存在するシステムを下敷きに、そのメカニズムを取り出し、装置と動作を用いたパフォーマンスである。モチーフにした現象が持っているイメージを取り除き、メカニズムだけにすることで、現象自体について考える試みだ。

これまでメカニズムを可視化することでそのものを「理解すること」に焦点を当てていたが、今回は大きすぎるか小さすぎるかもしくは物質がなく不可視のシステムを可視化する工程で、本来なかった支持体や形態が生まれることに焦点を移す。

重力のある身体スケールのもと、新たに生まれた構造体と動作のパフォーマンスにアニメーションを加えることで、より構造と素材感を感じることができる映像作品に挑戦したいと考えている。

迎英里子/1990年兵庫県生まれ。2015年京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻彫刻修了。屠畜や原子核分裂、国債の仕組みなど世の中にある様々な現象をモチーフとし、その仕組を可視化した装置を使ったパフォーマンス作品を制作する。主な展覧会に「HIAP OPEN STUDIOS」(Gallery August、ヘルシンキ、2018年)、「OPEN SITE 2017-2018 不純物と免疫」(TOKAS本郷、2017年)、「ALLNIGHT HAPS 2017 前期 日々のたくわえ#3 アプローチ0.1」(HAPS、2017年)、「新しいループ・ゴールドバーグ・マシーン」(KAYOKOYUKI・駒込倉庫、2016年)など。秋田公立美術大学助手。

8月14日から3週間、対馬にレジデンスに行ってきた。迎英里子
2019/09/05

PROJECT 〈04〉 長坂有希
2019/09/10

私はこれまで、生活をするなかで出会ったものや、人、出来事をテーマにして作品を作ってきた。

なにかがそこにあることの背景には、とても多くの事象が複雑に繋がりあっていて、その繋がりの結果として、そのなにかがそこに存在している。したがって、それがどんなに目立たない、些細に見えるものごとであっても、その背景にある繋がりを注意深く辿っていけば、いかなる出来事や、場所、時代にも辿り着くことができると思っている。

それは、近くに流れている用水路を出発して、川を下り海に出て、太平洋を進んで時空線を越え、マゼラン海峡も越えて大西洋を渡り、どこかの港町から川を上流に向かって進み、ある町で陸に下り立ち、その川にかかる橋からの風景を眺めるみたいなことだと思う。

来年の春に秋田で見せる作品を作るために、この秋に秋田に滞在することになっている。秋田で生活をするなかで、どんなものごとと出会い、それについて深く知ることで、その先にどんな風景を見れるのだろうと想像すると、楽しみでしかたがない。

2019年9月 東京にて

長坂有希/1980年大阪府生まれ。テキサス州立大学芸術学部卒業、国立造形美術大学シュテーデルシューレ・フランクフルト修了。2012年文化庁新進芸術家海外研修制度によりロンドンに滞在。リサーチとストーリーテリングを制作の主軸とし、遭遇した事象の文化、歴史的意義や背景の理解と、作者の記憶や体験が混じりあう点に浮かび上がるものを、様々な媒体をつかい表現している。主な展覧会に「子兎の輪郭」(トーキョーアーツアンドスペース、2019年)、「Quatro Elementos」(ポルト市立美術館、2017年)、「マテリアルとメカニズム」(国際芸術センター青森、2014年)、「Signs Taken in Wonder」(オーストリア応用美術・現代美術館MAK、2013年)など。

PROJECT 〈02〉 岸健太
2019/08/20

「CIRCLED MIGRATION(仮題)」

日本の地方では、廃農者を対象とする中古農機具売買のビジネスがある。ここから、中古農機具の「旅」を追跡してみる。中古農機具は海を越え途上国の農家に売られる。やがて機械化によって余剰し地域から押し出される農民は、地方から都市へと流入することだろう(その現象はすでに大規模に生じている)。そして労働力は都市においてもいずれそこが受け止められるキャパシティを超え余剰し、グローバルな移動をはじめる。ついには彼ら/彼女らの一部は日本の地方にまで漂着し、農業も含む「人材」が不足しているあらゆる労働を担うことになるだろう(それももう始まっている)。異なる地点に帰還する移動もまた「旅」と呼ばれるのだろうか。秋田の農村からはじまり、インドネシア・ジャワの農村とを往来して、やがてかたちを変え元の場所に回帰する物と人の「旅」の物語を紹介する。

闇の奥 岸健太
2019/09/12

映画「地獄の黙示録」では、主人公の「Saigon … shit, I'm still only in Saigon …(サイゴン…くそったれ、まだサイゴンか…)」のセリフが川を遡上し密林の奥に向かう旅の物語をひらく。「まだ、ここ」からはじまる旅は、土地に固定されて燃る想像の枷を解き、未知の「原場所」に私たちを向かわせる。この世に潜在する様々なあたらしいものの達が棲む、間の奥へ。

カンポン(Kampung)はマレー文化圏の「集落」を指す語だが、それが「おもしろい」場所であるらしいことを、シンガポールの美大で教えていた頃に同僚のアーティストや建築家達からよく聞かされた。彼らの関心は、シンガポールから古趣味的価値にあった一方で彼の関心は、会話のなかで「皮々紹介されたインドネシアでは農民が農村こと都市移住する」という噂話(シンガポールの高学歴エリートが仲間内で隣国の後進状態を揶揄するネタの一つだった)に向いていた。そうか、それは「おもしろい」場所にちがいない。シンガポールから10年後、そしていまから10年前の9月にバンコクに滞在していた。アジア金融危機で生じた高層ホテルなどの廃墟を視察するためだった。巨額の資本を投じた都市開発の失敗の現場を訪ね歩きながらそこに重なったものは、バブル経済崩壊後の業廃した東京の風景であり、あの「カンポン(都市に移入された農村集落)」の想像上の情景だった。バンコクから少し足を伸ばせばインドネシアだ。いまここで、あるいは東京で目にしているものとは異質な都市の現場を見ておかなくてはならない。ホテルに戻るとすぐに現地の友人に連絡をとり、数日後にはジャワの南都スラバヤに向けて急ごしらえの旅をはじめていた。エアコンで結露した水が滴る旧式の旅客機で現地空港に着くと、無数のテザーン(イスラム礼拝の呼びかけ)が気まぐれに共鳴する熱帯の空は夜の色を帯び始めていた。市内までの道すがら、表通りに面して一定の間隔で、それも際限なく現れる「ゲート」を車窓から追い続けた。「あれはカンポンの入り口だよ」と友人は僕に教えた。通過するゲートの奥へと視線で小路を進むと、本質的な闇がすぐに立ちはだかる。車を停めてもらい、間に分け入る。カンポンの闇は空間の各所からこちらを伺う。精霊の棲む農村の闇。旅人の無知や未知に宿る闇。アジアの楽観で肥える闇。少女達の瞳。

デングを土産に帰国し、けれど眠りずに病床でスラバヤで自分は止められないことを直感していた。都市のカンポンの長期調査の計画書を作りながら、闇の奥に旅することをやめて「おもしろい」のは、都市移民の末裔達がこの闇をいまだ手放さず、もしろそれを手懐け都市の闇として飼い慣らし、多様に異なる人々の生を包み保護する器(うつわ)とさせていることだ。そしてなによりも、それが現代を生きる僕らの顔象人だ(「計画」とは異なるやり方で実現されていることが心地よい。近代が手放したのがカンポンそれ自体ではなく(この人間居住の闇であることに、シンガポールのエリートは気づくだろうか。

間の奥へと方向付けられた僕の旅は、領域と縮尺を気まぐれに調整しながらいまも続く。カンポンの一点の闇の読解を通してグローバル化時代の邊境社会を継解き、それに連なる産業や民族の再編の兆しを捕えて再び人間居住のスケールに戻り、闇の奥を探り続けている。スラバヤで、秋田で、これから向かうどこかで。

旅から生まれる創造へのカオス
2019/09/05

岩井成昭

Photo:Yoma Funabashi

2019年度「旅する地域考」夏編(以下「旅考」)のメインテーマは「地相」である。「地相」とは、ある土地に対する客観的視座であると共に主観的判断でもある。旅考の舞台となった、秋田県小坂町・鹿角市における人々の営みは全て、独特の地勢と、鉱石や地熱など天然資源と深い関わりがある。また、この特徴について、外部者が理解しやすいスケール感を有した土地であることも特筆すべきだろう。

そして、この地を訪れた受講生9名、メンター8名、ファシリテーター2名の総勢20人余は、10日間、調査と議論を深めながら、人と土地のつながりを知り、そこから導き出せる表現の可能性を問い、それは地域に還元可能なのかを考察した。ここでいう「表現」とはアートを基盤にしてはいるが、必ずしもアートの文脈に拘らず、地域創造や職業開発、ジャーナリズムなど多様な分野に開かれている。

今回3回目となる旅考も過去2回に違わず、プログラムの要素がさまざまに化学反応を起こし、幾つかの忘れがたいシーンを創出した。その一例として、旅考では初の身体表現の専門家、高橋淳子氏にメンターを依頼したことがあげられる。彼は会期中2度にわたって身体を使うワークショップを実施してくれたが、受講者がそれぞれ体感した鉱山、湯治場、昔語り、環状列石、などの要素を最も身近な表現素材である自身の身体で統合するというアイディアを与えてくれた。また、岩間朝子氏は、地産の有機野菜を全員が調理し食することで、私たちが何気なく認識していた食の概念に批評性を持つことを促した。フランス流のウィットをベースに、鉱物に例えた存在論を説く陶芸家のフィリップバルド氏もいた。このように、全てのメンターが地域から得た知的挑発をもとに、それに返答する形で自身の専門と他領域との相互交換的な可能性を試みていた。受講者もそれらを繊細に受けとめた結果であろう。最終日のプレゼンテーションには、その多くが身体的、儀式的な手法を用いたプレゼンテーションにまとめたことが印象的だった。

旅考はプログラム毎で完結を目指すだけでなく、受講生が秋田を旅することで得たテーマを、将来的に膨らませ、さらに具体的なプロジェクトに発展させることを理想としている。そのためのケースワークとして、今回は旅考の初回受講者である、佐藤朋子氏の制作プロセスを全員で共有できたことは大きな収穫だった。佐藤氏が参加した初回の旅考では、羽後町や男鹿市、五城目町を巡っている。だが、彼女は引き続き小坂町や鹿角市地域まで足をのばし、奇しくも今回同様、鉱山とその労働者たちの痕楽であった無声映画に題材を得ていた。受講者との共有機会としては、その1ヶ月後に開催される佐藤氏の個展素材となる映像の収録現場に立ち会うというものであったが、1年間秋田で調査を続けた多くの情報が、事実とフィクションの混在するレクチャーパフォーマンスとして見事に編纂されており、小坂町の康楽館で実施されたその収録風景は、受講生たちにも大きな刺激になっていた。

●「旅する地域考」とは

秋田公立美術大学が展開する、国内外からユニークな講師陣を招いて実施するアートマネージメント人材育成事業。年間2回にわたり「旅」という行為を通じてリサーチと集中ワークショップを実施し、昨年の夏編では「表現者の視点を共有する」として企画者の育成、冬編を「地域に還元する」として創造的な視点を活かした企画者、運営者、実践者の育成を目標とした。2019年度では、企画者、実践者という領域は設けず、バックグラウンドの異なる受講者が、「地域におけるアート」「アートにおける地域」のあり方について、旅人の自由な視点から思考を試みる。

ARTS & ROUTES あわいをたどる旅

◎プロジェクト=2019年5月始動 現在進行中
◎展覧会=2020年4月25日(土)→7月5日(日)
※詳細は2020年2月に公開予定(秋田県内)

展覧会会場=詳細は2020年2月に公開予定(秋田県内)
出展作家=岩井成昭・岸健太・迎英里子・長坂有希・藤浩志
リサーチアソシエイト=石倉敏明・唐澤太輔・小松和彦
グラフィックデザイン=吉田勝信・梅木駿佑・土澤潮
企画監修=服部浩之
企画運営=NPO法人アーツセンターあきた
主催=秋田公立美術大学(岩根裕子・石山律・藤本悠里子・高橋ともみ)

【JOURNAL 1号】
2019年11月発行
発行:秋田公立美術大学
デザイン:吉田勝信・梅木駿佑・土澤潮

お問い合わせ・企画・編集:NPO法人アーツセンターあきた
〒010-1632 秋田市新屋大川町12-3 秋田公立美術大学アトリエもちさだ内
Tel:018-888-8137/Mail:info@artscenter-akita.jp
https://www.artscenter-akita.jp

www.artscenter-akita.jp/artsroutes

秋田公立美術大学 AKITA UNIVERSITY OF ART
arts center akita

【プレ展覧会】木:これから起こるはずのことに出会うために
長坂有希

会期=2019年11月16日~2020年1月12日/入場無料
会場=秋田公立美術大学ギャラリー BIYONG POINT
(秋田市八橋南1-1-3 CNA秋田ケーブルテレビ社屋内)
休館日=2019年12月29日~2020年1月3日

大潟神社のしめなわ
大潟村の風景

なまはげ(男鹿半島)
鹿島様、水神社(大仙市)
排出されつづける水、八郎潟残存湖

秋田犬
死んだ人と生きている人が一緒に踊る空間
防潮水門(八郎潟)

水を排出するためのポンプが置かれた部屋、南部排水機場(八郎潟)
八郎潟残存湖の淡水が海水と混じる地点
稲刈りのステンドグラス、秋田県立博物館

石倉敏明のブックガイド

『悲しき熱帯』I・II

クロード・レヴィ=ストロース著
川田順造訳
中央公論新社(中公クラシックス)
2001年

20世紀初頭のベルギーで生まれ、フランスで育ったレヴィ=ストロース。印象派の画家であった父の影響もあって、彼は若い頃に芸術・哲学・数学・科学に没頭し、日本の浮世絵にも慣れ親しんだという。やがて故郷での哲学教員を経て大西洋を渡り、新天地ブラジルの大学教師となった彼は、アマゾンの密林に暮らす様々な「他者」と出会い、一人の人類学者に生成する。

「私は旅や冒険が嫌いだ」という有名な導入で始まる本書は、定住に対して移動を称揚し、異郷での揺れ動く視点やアイデンティティーの変容を強調することで満足する凡庸な旅行記の類とは訳が違う。本書は、二十世紀という激動の時代を生き抜いた人類学者の生涯を貫く、絶対的な普遍性と独自性をめぐる旅の記録であり、彼が他者との出会いの中で、世界そのものを発見する終わりなき旅の成果でもある。その旅は読者の人生に受け継がれ、さらなる軌道を巡ることになるだろう。レヴィ=ストロースによる「旅に抗う旅」の思想こそ、来るべき芸術実践の道標となるに違いない。

秋田初訪問
長坂有希
2019/08/18-22

2019年8月18日から22日までの5日間、下見のために初めて秋田を訪問しました。

回転展望台から見た大潟村

寒風山回転展望台(男鹿半島)

減反画廊(横手市)
西馬音内盆踊り(雄勝郡羽後町)

田植えのステンドグラス、秋田県立博物館

2019/07/18
展覧会出品作品に関して現段階で考えている内容を記載ください。
最終的に変更可。
(PROJECT01~05)
事務局より

2019/08/16
対馬での旅の記録を書いてください。
制作レポートというより
旅日記のようなイメージです。
事務局より

2019/08/19
今回の秋田での
滞在の記録を書いてください。
「菅江真澄もしくは
秋田とのファーストコンタクト」
という題材。
事務局より

2019/08/14
8月に実施した「旅する地域考」
夏編 レポートをお願いします。
事務局より

2019/08/14
インドネシアでの滞在(旅・移動)の
記録を書いてください。
事務局より

旅する地域考・夏編
レポート